

開悟院講師の經藏を訪ねて

桑 谷 觀 宇

一五六

開悟院師の事蹟を探查したいとは、數年來私の腦裡を去らざる念願であつた。これには相當理由あることで、圓滿寺は自坊と僅か二里の近きにあり、且つ亦私の祖父觀成寮司が努めて師の錄を蒐集して、愈々開悟院師への關心を深めしめてくれた等の事情によるからの事である。去夏其の機會に恵まれ、秋風漸く吹き初むる九月二日、親しく圓滿寺を訪ね、靈旌講師の墓前にぬかつきて猶德化普ねき風格を偲び、又經藏に遺さるゝ數多き自筆の錄に思ひを不朽の學解に馳せば、愈々晩年の勞苦が新しき迫力を以て身に沁むを禁じ得ぬのであつた。庫裡

の客間を飾る日南法海師の「冥加」の二字額、清楚にして而も雅趣を失はぬ雲華院師の畫軸は、自ら靈旌師生前の

華かなる交友の一端を肯かしめ、又書齋を飾る開悟院師の「樂在書案」の額面は、死の直前、病中且つ盲目を押して尙安樂臺に乗じてまで夏安居に『愚禿鈔』を講ぜる史實を追想せしめて、師の一生を端的に云ひ盡せる尊き文字として感銘殊に深きものがあつたのである。

猶經藏は今日まで何人にも開放せられざりし所と云ふ。幸ひにも調査し得たことに對し只感激のほかはない。此處に拙き一文を草し、先哲の遺業を紹介せんとするのにもかゝる所以に基づくのである。兎に角僅か一日に滿たぬ短時間に於て多大の收獲をおさめ得たのは、全く住職菊島俊雄氏の一往整理を了せられてゐた賜物であることの特記して、厚く謝意を表する次第である。

經藏の中央は一切經によりて滿たされ、四方に整然と並ぶ數十箱の書箱は、開悟院師・見慶贈擬講・大慶擬講と三代學匠輩出の功績を傳へ、開悟院師の自筆本のみにても數箱に及んでゐる。されど斷簡又多く、今日到底整理し能はざるもの三箱に餘り、別に善導の疏の科文を始め、諸種の手控としての胴付け等優に一箱を占むる有様である。今此等は別として、宗義の述作大約五十部の自筆本に數部の書寫本をも加へて之をこゝに報告し、猶見慶・大慶父子にも一言して參考に資するであらう。

大體開悟院師の筆録は大半卷首題下・奥書の何れをも缺き、靈旺の署名を置けるもの僅か『散善義拾要』下卷奥、『阿彌陀經略解』奥及び『妄盡還源觀機解』奥の三部に見らるゝに過ぎず、別に『阿毘達磨俱舍論指要鈔』『分別智品第七』以下の自寫本の奥に

「右此抄寛政第五之上天霜月從加州靈昭子請借專沉雜亂之心寫取之物也

靈 旺(花押)」

と記すものを加へても、四箇處に其の自署を遺せるのみ

開悟院講師の經藏を訪れて(桑谷)

である。從つて此等に於て示さるゝ筆蹟書體が師の著書決定の鍵となる譯であるが、多くは自筆本たることは何等疑念を差挿む餘地なく、爲めにそれ等は署名なき儘自筆本と斷定せること云ふ迄もない。以下簡潔なる解説を試みつゝ、あらゝ紹介することゝしよう。

三

- (1) 『大無量壽經序分要解』(漢)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
(2) 『大經三輩聞記』(片)一卷 隨緣記 圓滿寺藏

奥に「享和二四月 說者靈旺 聞者隨緣」とあり、下卷のみ現存す。靈旺師若年(二十八歳)既に『大經』『三輩段』を講ぜるものなりしことが知らるゝ。

- (3) 『願成就文聽記』(片)一卷 深成記 圓滿寺藏
奥に依れば、弘化四年二月郷里越中放生津專念寺に於ける聽講筆記。

- (4) 『三願大意』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
開卷劈頭「今某等ノ所望ニ應シテ三願ノ大綱ヲ辨釋セハ」云と述べらるゝが、講義の會所年時何れも明瞭を

缺く。『眞宗學匠著述目錄』(二六)に卷數不明なる儘「十八・十九・二十之三願大綱」の名を列ねてゐるのは、正しく此の一本を指すものゝ如くである。

(5) 『觀無量壽經記』 (片)五卷 (自筆) 圓満寺藏
『眞宗全書』收録の天保十年の『觀無量壽經講記』九卷と内容に於て大差なし。『講記』の底本となれるが恐らく本書五卷たるべく、述作の年時も大體その頃のものゝと推定されてよい。

(6) 『阿彌陀經略解』 (片)一卷 (自筆) 圓満寺藏
奥に「天保五甲午載從六月十六日至七月十一日畢 釋靈睦」と云ふ。大谷大學に天保五年の聽記『阿彌陀經講義』一卷を藏し、圓満寺には別に年時不明の越前福井御坊に於ける順成の聽記『阿彌陀經聞記』(片)一卷が所藏せられてゐる。

(7) 『易行品講録』 (片)一卷 觀成記 私藏
私に藏する一本は副講の折の聽記であるが、圓満寺には勸澄記『易行品聞書』一卷あり、且つ表紙に「亥四月二十日ヨリ五月十日マテ上市常福寺ニテ寮司靈睦師

述」云と記されてゐる。是れによつて思ふに、寮司以來幾度か家郷にありて『易行品』を講ぜることが推察される。

(8) 『論註要義錄』 (片)六卷 (自筆) 圓満寺藏
文政八年夏安居に於て『論註』を講ぜる折起稿せられたものであらう。大學に藏せらるゝ『論註乙酉記』七卷は其節の聽記である。自筆本第一卷は成上起下釋(上七)の終迄、第二卷は「觀彼世界相勝過三界道」の觀察門の釋より正報莊嚴第一座功德(上卷・本文・二十二丁右)の註解に至り、第三卷は「相好光一尋色像超群生」の身業功德に始つて『論註』上卷の解説を了し、第四卷は下卷に始つて氷上燃火の釋に終り、第五卷は「衆生體者」(下卷・本文・十六丁左)以下、又第六卷は第五善巧攝化章以後に及んでゐる。

(9) 『安樂集大意聞記』 (片)一卷 深成寫 圓満寺藏
奥に依れば、「辰夏」筑後に於て講ぜられたるもの。

(10) 『玄義分撮要錄』 (片)一卷 (自筆) 圓満寺藏
著作の年時を缺くが、次下に記すが如く、『序分義』の錄が天保二年、『散善義』の錄が天保四年の作なれば、

本書も或は天保初頭頃の講議であつたのではないかと察せられる。又序、定、散の三部を講了せるより、後日疏註の完成を期してものされたものであつたかも知れない。兎に角本書の發見は、靈旺師の四帖疏講義を完結せしむる意味に於て格別關心が拂はれてよい。

(11) 『底分義略記』

(片)二卷 (自筆) 圓滿寺藏

第一卷々首題下に云く、「天保第二辛卯霜月京師於高倉學寮」と、『眞宗大系』所輯本『觀經序分義講記』に、天保二年十月十五日開講、同年十一月十五日滿講の由を記してゐるのは、本當の聽講筆記たることを有力に物語つてゐる。

(12) 『定善義略記』

(片)三卷 (自筆) 圓滿寺藏

書名の一致より察するに、『序分義略述』を著せる天保二年以後、又『散善義』を講せる同四年以前に於ける作であらう。大體天保三年頃の起稿にかゝるものではあるまいか。第二卷は寶池觀より、第三卷は第九眞身觀以下に及んでゐる。『眞宗大系』所輯の底本亦本書の聽記であるらしい。

開悟院講師の經藏を訪れて(桑谷)

(13) 『散善義拾要』

(片)三卷 (自筆) 圓滿寺藏

奥云、「于時天保四癸巳歲八月二日於高倉寮錄之畢 釋靈旺」と。『眞宗大系』所輯『觀經散善義癸巳記』五卷、これ亦本書の聽記にして、大學の所藏にかゝる。

(14) 『言南無者講判記』

(片)一卷 觀空記 私藏

圓滿寺に三靈擬講の筆記『言南無者隨聞記』一卷あり、奥には嘉永元年林鐘、江戸報恩寺に於ける開悟院の講辨と云ふ。

(15) 『般舟讚序分義要』

(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏

(16) 『般舟讚撮要錄』

(片)二卷 (自筆) 圓滿寺藏

下卷は「唯恨衆生疑不疑」(本文・八)を「二、傷歎疑惑」勸專心」と科し、此の釋以下に及ぶ。圓滿寺には別に文道の聽記を藏し、下卷に「天保第五甲午三月朔日滿會 於普照院殿圓滿寺講師開演 文道聽之」の奥を有す。此の筆記本より察するに、恐らく本書は其の折の起稿本と見做して大過なかるべく、かつ前掲『般舟讚序分義要』が序分のみに終れるを、更に「般舟三昧樂」の本文に迄解説を擴充すべく意圖しての事であ

つたのであらう。かくて開悟院師は、天保初頭以來疏・具疏の研究に専念せる事情が窺知さるゝに至るのである。

(17) 『選擇集綱要』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

岡崎氏論文「眞宗大谷派講者列傳」(『大谷學報』
十五)

中開悟

院師の傳に觸れて、講師拜命の嘉永二年十月の翌月十四日、御屋敷に於て『選擇集』大意を開講、此の折連枝深量院御聽講のことに及ばれてゐる。單に書名よりの推察ではあるが、或は此時の草稿本として起筆せられたものではあるまいか。

(18) 『二祖一致辨』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

原本は無題なるが、卷頭「凡ソ念佛爲本ノ義ハ元祖一代ノ教道、信心爲本ノ義ハ宗祖ノ御已證、故ニ世人謂ラク、師資ノ立義銚楯セリト、由テ今相承ノ釋義ヲ探テソノ疑氷ヲ消解スヘシ」とあり、故に内容より私に假に名付けた書名である。墨付二十三紙。

(19) 『唯信鈔拾要』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

奥に「于時天保十己亥仲秋於高倉寮錄之」とあり。『眞宗

大系』には大津曉悟師の筆寫本を收録し、それには「右天保第十年己亥年秋八月三日開講同十二日撤講席數十會」等の奥を有す。故に彼此奥書的一致より該『拾要』は之が稿本として學寮に於て起筆せられたものであることが知られ、而して八幡御坊に於て講ぜられたのであつた。天保十三年極月三日再度『唯信鈔』を講じ、この折の順成の聽記『唯信鈔聞記』一卷が圓滿寺に藏せられてゐる。然し後者の會所は明瞭を缺く。

(20) 『廣文類總序敬信錄』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

(21) 『御本書總序錄』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

本書無題なるが、さきの『敬信錄』に區別して私にかく呼稱せるのである。兩書は草稿再治の關係に置かるべきものゝ如くである。

(22) 『眞實教文類辨義』

(片) 漢混 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

(23) 『教文類再考』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

後者は本文につき要點のみ錄出されてゐる。

(24) 『廣文類五願大意聞記』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

(25) 『廣文類五願大意續講聞記』

(片) 一卷 (自筆)

圓滿寺藏

奥書によれば、前者は天保十二年三月二十九日より開講の聴記、後者は其の續講筆記にして、同年七月十九日開講の奥を有す。會所何れも明白ではない。

(26) 『顯淨土眞實教行證文類大意』

(片) 一卷 觀空記 私藏

六軸標宗の文につき、『廣文類』一部の大綱を論ず。奥書により、本書は能登より多數所化到來懇望せるため、止むなく講ぜられしものなることが知らるゝ。會所明かではないが、恐らく自坊に於けるものなのであらう。

(27) 『二種化土料簡』 (片) 一卷合冊(自筆) 圓滿寺藏

邊地、懈慢の二種化土につき七問答を以て料簡す。本書亦無題なるが、内容より私にかく名付けておいた。

墨付六紙。『冠頭和讃』一首私考』一卷及び『浮土宗名論』一卷と合冊す。

(28) 『正信念佛偈略記』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

(29) 『正信偈略記』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

前著は天保三年二月、越中城端御坊に於ける講義録であり、後著は天保六乙未歲初秋上旬、兩御連枝の所望に

開悟院講師の經藏を訪れて(桑谷)

よつて講ぜる記述にして、自ら席數十二會に及ぶことをも記してゐられる。猶圓滿寺には天保十一年春、三州赤羽根御坊に於ける順成の聴記『正信偈聞記』を藏するも、卷尾散佚して一卷の體裁をなさぬ。

(30) 『文類聚鈔敬信錄』 (片) 三卷 (自筆) 圓滿寺藏

四卷本なるも、第一卷缺けて三卷しか現存せず、本書恐らく天保七年夏安居の折起筆せるものなのであらう。

私に藏する『略文類隨聞記』は其の節に於ける聴記と思はれ、三十四席を以て終つてゐる。猶圓滿寺には、長濱御屋敷に於て十二會に互つて講ぜられた淳成の寫本『淨土文類聚鈔聞記』一卷を残してゐる。

(31) 『愚禿鈔詮要』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

卷數不明、現在下卷一卷のみを存し、第六深信の釋より以下に及んでゐる。天保六年十月九日劔先嗣講寮に於て『愚禿鈔』の下卷のみ開講、其の折の講記『愚禿鈔聞書』二卷が『眞宗大系』に收録されてゐる。大體詮要』はこの折の起稿と思はるゝ節あるのであるが、しかと斷定する譯にはゆかない。

- (32) 『入出二門偈攝要錄』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 (33) 『入出二門偈節義』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 文政七年嗣講に轉じて間もなき十二月、嗣講寮に於て『二門偈』を講ぜりと云ふ。兩書は此の前後の起筆なるべく、大學所藏の『二門偈講義』一卷はかの嗣講寮に於ける折の聽記と云はる。弘化三年夏安居に『二門偈』を辨ぜらるゝも、其の時の筆記『二門偈丙午記』五卷に比すれば上掲の二書は餘りに簡潔に過ぐ。故に安居の稿書別に存せるものありしならむ歟。
- (34) 『冠頭和讃二首私考』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 墨付六紙、『二種化土料簡』一卷及び『淨土宗名論』一卷と合冊す。

- (35) 『淨土和讃大意』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 (36) 『大經和讃略解』(片)一卷 (自筆) 大須賀先生藏
 圓滿寺には順成の寫本『大經和讃聞記』一卷あり、卷首題下に「上市於常福寺開悟院師講説」と云ふ。彼此比較するに、本書は家郷に開ける講筵の稿本であつた様である。著作の年時はさだかではない。

- (37) 『高僧和讃要註』(片)三卷 (自筆) 圓滿寺藏
 文政十年夏安居の稿書たるべく、第二卷は曇鸞讀より第三卷は善導讀以下に及ぶ。大學に當時の聽記『高僧和讃講錄』三卷を藏し、『眞宗大系』(『丁亥記』三卷)『眞宗全書』(『聞記』)所輯本亦これが聽講筆記である。
- (38) 『尊號眞像銘文要義錄』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 (39) 『尊號眞像銘文節義』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 後者の内題下に「本」の一字あり、元來二卷本であつたものと察せらるゝが、末卷は散佚して見當らぬ。本著は前掲『要義錄』を更に布演せるものと思はれる。
- (40) 『一念多念證文略記』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 天保七年九月十日より劍先に於て『一念多念證文』を開講、十月九日滿講のことありと云はるゝから、本書はこれと前後して起述されたものではあるまいか。
- (41) 『唯信鈔文意考記』(片)一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 本書は天保八年六月、劍先嗣講寮に於ての講義の稿本でもあつたらうか。翌天保九年二月四日再度『文意』を富山市永福寺洗心樓に於て講ず。私藏『唯信鈔文意』

録』一卷はこの時の聴記である。圓滿寺にも天保九年の聴講筆記『唯信鈔文意聞記』一卷が藏せられてゐる。

本書に於て、『鈔』と『文意』との同異につき十箇の左右あるを指摘し、一々これを會通する邊り斯學研究の一指針たるを失はない。

(42) 『末燈鈔來迎不來迎一章要義』

(片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

(43) 『末燈鈔自然法爾章秘要』(片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

(44) 『執持鈔私考』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

『一念多念證文』撮講後程なき天保七年十二月三日、劍先嗣講寮に於て『執持鈔』開講、同月二十五日滿講のこ
とあり、『眞宗大系』所輯『執持鈔丙申記』一卷は此の折の聴講記である。自筆本『私考』一卷は或は此の稿書で
ゞもありしならむ歟。

(45) 『本願鈔考錄』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

私藏『本願鈔圓滿記』一卷内題下に、「文政七甲申春於
京師寶法堂口決」とあり。内容の一致より察するに、
右自筆録は此の折の稿本たるべく、文化七年春京師に

開悟院講師の經藏を訪れて(桑谷)

於ての述作と推せらる。爾來開悟院は再三『本願鈔』を
講述せられ、弘化四年の聴記『本願鈔隨聞記』一卷大學
にあり、嘉永元年五月淺草御坊に於ける聴講録『本願
鈔戊申記』二卷亦『眞宗大系』中に收められてゐる。

(46) 『願々鈔大旨錄』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

後尾散佚して完本でなきが惜しまるゝ。『眞宗大系』所
輯『願々鈔丙戌錄』一卷は文政九丙戌秋の講述と云はる
ゝから、或は此の前後の頃の述作と見てよいのであら
う。

(47) 『最要鈔聞記』 (片) 一卷 順成記 圓滿寺藏

卷首題下に依れば、天保十二年七月二十六日江州野田
本誓寺に於ける講述、猶大學所藏本『最要抄講義』一卷
は嘉永元年の聴記である。

(48) 『眞要鈔略記』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

(49) 『淨土眞要鈔錄』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

後著外題下に「上の細字を置く、従つて現存するもの
は上卷のみにして、他は散佚せるものと思はるゝ。『眞
宗全書』所輯『淨土眞要鈔隨聞記』一卷が「文政七歲甲

申初秋」と云はるゝから、前掲自筆の二本も大體この頃の作であつたのであらう歟。

- (50) 『顯名鈔光壽錄』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 文政十二年正月に『顯名鈔』を講ぜられしこと、大學所藏本『顯名鈔隨聞記』一卷によつて知らる。本書亦或は其の節の起筆にかゝるものではあるまいか。

- (51) 『持名鈔記』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

『眞宗大系』に『持名鈔講義』一卷を輯録し、これが解題に於て、講述の年時不詳なるも、布界師の手澤本の終に「文政十一戊子年十一月朔日寫畢」とあるより、或は其頃有志の爲めに講ぜられし歟と考證せらる。故に右自筆本亦これが稿書と推定、その頃の作と見てよからう。

- (52) 『教行信證大意摘要錄』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 (53) 『教行信證大意節解』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 (54) 『教行信證大意記』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 外題右によれば、文政十一年九月大津御坊に於ける講述なることが知られる。

- (55) 『御文二帖目第十一通講義』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

- (56) 『御一代記聞書詮要』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏

- (57) 『佛心凡心一寐事』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 墨付僅か七紙の小冊子。

- (58) 『當流ニ於テ念佛ノ數ヲ記セサル事』 (片) 一卷 (自筆) 私藏

- (59) 『淨土宗名論』 (片) 殘簡五紙 (自筆) 圓滿寺藏
 『冠頭和讃二首私考』一卷、『二種化土料簡』一卷と共に合冊さる。末尾に綴ぢられてゐた爲めか五紙のみを残して他は散佚し、到底一卷の體裁をばなさない。

- (60) 『肉食妻帶辨』 (片) 一卷 (自筆) 圓滿寺藏
 私藏「肉食妻帶辨」一卷の奥に「于時文化七年歲高岡於學寮靈暉寮司開筵」と云ふ。右自筆本もこの頃の作と見てよいであらうか。猶圓滿寺では開悟院師の寮司任時を文政元年(四十四歲)歟と傳ふるも、右奥書によつて文化七年(三十六歲)既に寮司たりしことを知るべきである。

(61)『妄盡還源觀機解』(漢)一卷(自筆) 圓滿寺藏

奥書に云く、「天保五甲午載從六月十六日至七月十一

日畢 釋 靈暉」と。

四

上來開悟院師自筆の錄五十二部七十一卷を紹介し、此の間併せて師の講述聽記九部九卷をも添加して參考に資せることであつた。世に刊本として行はるゝ『御本書講義』の稿本と覺しきものゝ存せざりし點、一抹の寂寞の感なき能はなかつたのであるが、而し今日猶多くの自筆本を藏し、且つ此の間これ迄學界未聞の著も可成り介在してゐることは餘程注目されてよいであらう。如上のほか所藏の諸錄其の數亦決して尠からざるのであるが、この方は餘り見るべきものなく、開轍院師の著『第十七八兩願隨聞錄』一卷、及び隣派柔遠撰『四十二對辨』二卷を以て一往満足せねばならなかつたのである。又開悟院師が頓成を調理せる關係上、二種深信に關する幾多文献の發見をも期待せるのであつたが一部も存せず、僅か嘉永

開悟院講師の經藏を訪れて(桑谷)

三年幕府の需めによつて『二種深信旨歸』一卷を寺社奉行に提示せられたとの史實を想起せしめらるゝにとゞまらる。猶會て私が能登に赴ける折、「越中國開悟院著」の卷首題下を有する『二種深信之領解之事』一卷を見たことがある。(恩通寺藏)此れが寺社奉行提出の『旨歸』と同一内容のものであつたかどうかは知るに由なきも、兎に角珍重に値する錄と云つてよいであらう。圓滿寺には頓成調理の砌、開悟院師が達如宗主より拜受せる念珠一連を藏し、師の功績を末代に傳へてゐる。又頓成事件にて出府の折、同伴せる渥美某一夜にして描き、以て靈暉師に贈れると云ふ一軸あり、見るからに二種深信不離一具の様が意味深く表現されてゐる。

猶經藏中に、『正信偈』並びに『和讃』に關する開悟院師の若年の自寫本四部十卷を收めてゐる。即ち

(1)『正信偈隨聞記』(片)一卷(著者不詳)

奥云「寛政二戊歲八月二十二日 新川稗田邑 靈翁書之」

(2)『正信偈會抄句義』

(片)三卷 惠然述

上卷奥云、「寛政三亥載霜月六日書終 越中州稗田邑

圓満寺(靈應。明十七歲)

(3) 『淨土和讃聞書』

(片)二卷 柔遠述

下卷奥云、「寛政四歲五月東江上於淨泉寺

講師 高柳明樂寺

靈應」

(4) 『正像末和讃堅高録』

(片)四卷 自然撰

末卷奥云、「寛政四歲七月下旬

靈應寫之」

と記すがそれであつて、今煩を厭はず掲出せるのは、奥書の署名にも一往注意されてよいと考へたからである。

つまり此等によつて、開悟院師は若年靈翁・靈應とも呼稱せる事實を知る可きである。或は云はん。『隸名記』によると、開悟院師の宣明門下に加はれるのが「壬子」、即ち寛政四年十八歳の時にして、而も署名に靈暉と云ふ。然るに上掲の四本何れも寛政四年以前に屬するから、逆に靈翁或は靈應の音通より入門を機に靈暉と稱し、爾後之を用ひられたのではあるまいか。

五

開悟院師の嗣子に開闡院見慶(亦深妙と云ふ)あり、文

化十一年夏擬寮司にして『瑜伽釋』を會讀し、『講義年鑑』には深明に作る。安政元年寮司の砌高倉に『華嚴旨歸』、翌二年秋講に『法界無差別論』、同三年夏『華嚴五教章』などそれら副講し、此の間、嘉永五年夏當役知事を勤むる等安居に活躍してゐるが、經藏中にその一部の著述も見出し難きを至極遺憾とせなければならぬ。安政四年十一月寂、十二月七日擬講を追贈せられてゐる。

又孫大慶(三靈とも稱す)に關する述作としては『入阿毘達磨論』の自記録數卷と、『末燈鈔決擇記』一卷を藏するのみなるが、私に『三願三經三機三往生辨』一卷、『選擇集三心章大意』一卷、『最要鈔錄』一卷、『十六題辨略』一卷、『十七箇兼題筆記』一卷、『試驗四條講義』一卷、『不二門指要鈔聽記』一卷の七部七卷を藏してゐる。

大慶は文久三年寮司にして夏安居に『一心三觀』を副講し、元治二年には『入阿毘達磨論』、慶應二年には『入正理論』、明治元年『法華科註』、同年秋講『觀經疏妙宗鈔』等を副講し、明治二年十月には員外擬講に進み、同二十二年十二月二十七日には二等學師を追贈せられてゐる。

六

經藏を出づる折節、菊島氏が私に一軸を示された。是れは開悟院師の一周忌に詣でる高弟開華院師が、窓邊を打つ秋雨に一入恩師を追想する思慕の情深きを、切々たる哀調もて詠める一首にして、先づ「開悟院大講主乃御一周忌に雨ふりければ」と置き、次に

「天地の神も涙やこほすらむ

あとゝふけふの秋のむら雨」

と記されてゐる。遂に請ふて譲り受けることを得たのである。開悟院師の似影拜見を最後に、菊島氏の歡待を謝しつゝ、盡きぬ名残を後に圓滿寺を辭せる時は、既に暮色たれ初むる頃であつた。

(昭和十三・三・一五・稿)